里見美禰子という女

Junko Higasa

夏目漱石は女性の社会進出を阻んだ人ではない。同じ土俵で戦えるだけの能力があれば認める人だった。ただし実際には、この時代の女性にそれは難しかった。西洋化で国内文明が急速発展する世の中で、今まで家の奥にいた女が男に追いつくには 100 年かかるだろう。しかし 100 年を一気に飛び越えることはできない。それがこの時代、多くの同輩に先んじて発展し始めた女の葛藤であった。男の 100 年を一気に手に入れようとする女の焦燥であった。それが『三四郎』広田先生の里見美禰子評に現れる。『あの女は落ち付いていて、乱暴だ』『イブセンの女は露骨だが、あの女は心(しん)が乱暴だ。尤も乱暴と云っても、普通の乱暴とは意味が違うが。野々宮の妹の方が、一寸見ると乱暴の様で、やっぱり女らしい。妙なものだね』『里見のは乱暴の内訌ですか』

野々宮よし子は自我をそのまま押し出すが、そこには男を繰る計算はない。『あなたは御嫁に行かないんですか』という三四郎の問いに『行(ゆ)きたい所がありさえすれば行きますわ』と焦らない。自分を一方的に出しながら、それを受け入れる男を待つ。一方、美禰子は理想の結婚のために男を自分の都合に引き寄せようとする。焦る心は自我を抑えて相手に懐を開かせようとする。だからよし子よりも乱暴なのだ。

その美禰子の結婚観は、広田先生の引越しの手伝いの場面に現れる。窓の外の白い雲を眺める美禰子。その雲は駝鳥の襟巻(ボーア)に似ている。ボーアを巻けるのは女のステータスである。三四郎が野々宮さんから聞いた通り「白い雲は雪の粉だ」と教えると、美禰子は否定を許さぬ調子で『雪じゃつまらないわね』という。「雲でなければ遠くから眺めている甲斐がない」のは「高価な襟巻(候補の男)だからこそ眺める価値がある」ということだ。『あなたは高い所を見るのが好きの様ですな』『ええ』それが美禰子の生活目線である。美禰子はそんな高みにある結婚生活を目指している。

そして美禰子の乱暴は、野々宮さんとの「空中飛行器」の会話に現れる。『高く飛ぼうと云うには、飛べるだけの装置を考えた上でなければ出来ないに極まっている。頭の方が先に要るに違いないじゃありませんか』『そんなに高く飛びたくない人は、それで我慢するかも知れません』『我慢しなければ、死ぬばかりですもの』『そうすると安全で地面の上に立っているのが一番好い事になりますね。何だかつまらない様だ』野々宮さんは「女には詩人が多い」と云い、広田先生は「男は純粋の詩人になりきれない」という。美禰子は高く飛ばなければ気が済まない人である。自分が飛べるだけの力を備えないうちに、代わりに飛べそうな男と結婚したい人である。けれど野々宮さんが地位に着くまで、また三四郎が頭を拵えるまで待てない人である。彼女は飛べるだけの装置を備える前の男たちに自分の夢を託そうとする。だから詩人のようであり、現実的には乱暴なのである。しかし男たちは純粋の詩人になりきれない。

この時代の女は、結婚しなければ生活が立たない。生活できなければ、三四郎が見た轢死のようになるかもしれない。あるいは空中に、水に身を投げるかもしれない。「妹の居場所がなくなる兄の結婚」という危機が迫る美禰子の心中は、すさまじい勢いで回転していた。美禰子は、三四郎が車中で会った京都の女のような本能的度胸を発揮できない教養の持ち主である。美禰子にもベーコンは役に立たない。(2014.5.24)